『御堂関白集』の伝本と本文

妹尾好信

はじめに

『御堂関白集』の現存伝本は、約四十本とも五十本とも言われているが、「丹鶴叢書」所収の版本以外はすべて写本で伝わる。そして、それらは同一の祖本から派生した同源同類の本ばかりのようで、特に異本と言えるようなものはない。一本を除くほとんどの本が七十三首の和歌とそれに続く詞書の一部から成り、巻尾がとぎれた形になっていて、数箇所ある歌句の欠脱もほぼ全部の伝本に存在することから、巻末の脱落をはじめ、本文上かなり損傷の大きい本を共通祖本としていることが想像される。

伝源俊頼筆の古筆断簡を除いて近世初期を遡る古写本がないこともあってか、いまだ伝本や本文に関する研究はあまりなされていない。そこで本稿では、かなり粗雑ではあるが、これまでに調査しえた伝本の書誌と本文上の特色について記してみたいと思う。

一 『御堂関白集』の諸伝本

『御堂関白集』の伝本について、『国書総目録』（昭45・補訂版平2 岩波書店）は次のように写本二十八点と活字本三点を載せる。

〔写本〕

- ・国会（二十六家集 一）
- ・内閣
- ・静嘉（北慎言写、清慎公集の付）
- ・宮書（古歌集の内）（池底叢書 四八）（「御堂関白御集」、片玉集 二四）（一冊）
- ・九大（源賢法眼集・海人手古良集・故侍中左金吾家集と合）
- ・清心女大（「道長集」、古歌集の内）（大江千里集・平忠盛集と合）（一冊）
- ・東大 本居（海人手古良集・故侍中左金吾家集・源賢法眼集と合）
- ・竜谷（「御堂関白道長集」、四十人集の内）
- ・山口（左大臣高明集と合）
- ・川越（十二家集の内）
- ・島原
- ・彰考（中園集と合）（諸家集の内）（一冊）
- ・神宮
- ・天理（横山由清写）（「御堂関白道長集」）

・春海（文政七多勢子写、中園集と合）（源賢法眼集等と合）
・三手（左大臣高明集と合）
・高松宮
・久曽神昇（伊勢物語系図等と合）（一冊）

〔活字本〕
・続国歌大観　諸家集
・丹鶴叢書　七
・日本古典全集　一期

活字本のうち、「日本古典全集　一期」とあるのは、「日本古典全集」第一回『御堂関白記』下巻（大15　日本古典全集刊行会）の巻末に付載せられた「御堂関白歌集」をさすと思われ、これは与謝野晶子の編になるものである。その後書きに、「藤原道長の日記『御堂関白記』を校訂するついでに、同じ人の歌集を編み置かんと思ひ立ちて、諸書を探り読むほどに五十六首を得たり。即ち作られたる年代を考へ、また定かならぬものも私（ワタクシ）に推し當てて順序を構へ、大正十五年（一九二六）八月二日に写し終へつれば、是れを『御堂関白歌集』と名づけぬ」とあるように、ここで扱う『御堂関白集』とは全く別のものである。

また、ここには「丹鶴叢書」版本の記載がないが、『国書総目録』の続編として刊行された『古典籍総合目録』（平2　岩波書店）には、

〔写本〕
・今治河野美術館（文政四小津久足写　清慎公集他と合「清慎公師輔公道長公御集」一冊）

〔版本〕
・国文研（一冊、「丹鶴叢書」の内）
・岡山大　小野（「丹鶴叢書」の内）
・新潟大　佐野（「御堂關白集」、「丹鶴叢書」の内）
・和歌山大　紀州藩（一巻、「丹鶴叢書　丁未帙」）
・天満宮（「丹鶴叢書　第六冊」）

と、写本一点版本五点の記載があって、版本はいずれも「丹鶴叢書」所収本で、同一の版本と見られる。すなわち、『国書総目録』と併せて、写本二十九点、版本一種の伝本が知られることになる。

一方、『私家集伝本書目』（昭40　明治書院）には、「藤原道長」の項に次のような伝本が登載されている。写本のみ略記する。

・彰考館（巳・六）　諸家集一
・彰考館（巳・八）　中園集と合綴
・彰考館（巳・八）
・書陵部（五〇一・四四八）　古歌集
・書陵部（五〇一・七四一）　御所本
・静嘉堂（五〇三・六）　松井文庫　清慎公集と合綴
・高松宮（歌二・六二）　有栖川宮旧蔵
・内閣（二〇一・四六〇）　楓山文庫旧蔵
・志香須賀　伊勢物語系図等と合綴
・志香須賀

・神宮（文・四二一）
・田中
・三手（申・三三）　今井似閑本　　高明集と合綴
・竜谷大（三三・五九一・四〇）　写字台文庫　四十人集
・天理（〇八一・イ・一五）　竹柏園旧蔵　慶応二横山由清校
・天理（九二一・三三・二二）
・岡山清心女大（三〇〇）　黒川家旧蔵　古歌集
・岡山清心女大（三二四）　黒川家旧蔵　岸本由豆伎校本、千里集等と合綴
・岡山清心女大（三一九）　黒川家旧蔵
・山口県立（一〇三）　今井似閑本
・九大（萩・ケ・二二）　　源賢法眼集と合綴
・島原公民館（一三五・一六）　松平文庫
・書陵部（四五八・一）　片玉集第二四

以上の二十三本で、これとは別に、「二十六家集」の項に次の伝本が登載されている。

・国会（二〇二・八七）　　二十六家集

この二十四本のうち、田中本を除く二十三本は『国書総目録』に所載の本である。逆に、『国書総目録』に載る本のうち、書陵部一本（池底叢書　四八）・東大　本居・川越・春海二本の計五本と『古典籍総合目録』所載の今治河野美術館本とは『私家集伝本書目』に未登載である。ここまでで三十点の写本の存在が知られることになる。

さて、国文学研究資料館閲覧室に設置の『国文学研究資料館マイクロ資料目録　累積簡略版（一九七六～一九九五年）』によれば、同館には、次の十六本がマイクロフィルムとして収蔵されている。

・彰考館（巳八）
・彰考館（巳六・〇六九四八～五四）　〈「諸家集」の内〉
・彰考館（巳八・〇七〇二九）
・東大国文（本居帙一〇八・四七八）
・書陵部（五〇一・四四八）　〈「古歌集」の内〉
・書陵部（五〇一・七四一）
・書陵部（四五八・一）　〈「片玉集前集」の内〉
・書陵部（四〇六・一〇二・一〇四～二）　〈「池底叢書」の内〉
・内閣文庫（二〇一・四六〇）
・書陵髙松
・静岡中央図葵（九二一・三三／二七）
・神宮文庫（三／一四二一）
・三手今井（歌／申／三三）
・山口図（一〇三）
・河野信一記念（三四七・八五六）
・刈谷図（五六四一）　〈「丹鶴叢書」の内〉

末尾の刈谷図書館本は「丹鶴叢書」の版本なので、写本としては十五点である。そのうち、静岡県立中央図書館葵文庫本は『国書総目録』『古典籍総合目録』『私家集伝本書目』のいずれにも登載され

ていない本である。この他、目録にはないが、国文学研究資料館には、ノートルダム清心女子大学蔵本のうち二本（『私家集伝本書目』所載の三本のうち先の二本）もすでにマイクロフィルムが所蔵されている（平成十一年八月現在）。

その他、『青山会文庫所蔵 和漢書分類目録』（平6 財団法人青山会）によれば、兵庫県篠山市の財団法人青山会にも写本一本が存在することがわかる。以上で、三十二点の写本と一種の版本（「丹鶴叢書」本）が知られることになる。

二 各伝本の書誌

上記の諸伝本に関して、目録類の記事に加えて、国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムや紙焼写真、また原本の閲覧などによってこれまでに調査しえた書誌情報を簡略に記しておく。未調査の本も少なくないが、ひとまずこれを中間報告としたい。所蔵機関の所在地によりほぼ東から西へと並べる。〈 〉内は、私に付した伝本の略称であり、以下の記述では番号とこの略称で伝本を表示する。

1 彰考館蔵本（巳・八） 〈彰甲〉

「中園集」と合綴。外題「御堂関白集 中園集 中園集」。内題「御堂関白集」。墨付11丁。一面10行。和歌1行書。傍書・線引・欄外書入（朱・青墨）等多し。扉裏に道長の伝を記し、「此端書古本ニアリ古本ハ春雨軒宗也ガ奥書ノ本也」と注記。「古本」「イ本」の異文注記多し。本奥書Aあり。書写奥書「文政六年令下ニ男清年一書中写之上以ニ春雨軒宗也自筆本一校ニ合之一称シ二古本一／而用ニ青墨一者則宗也カ本ン也／松屋主人源与清（花押）」「天保三年正月以福知山侯蔵本再校之所謂イ本者也平小山田与清」。文政六年（一八二三）小山田清年写、同与清校。

2 彰考館蔵本（巳・六・〇六九四八～五四） 〈彰乙〉

「諸家集 一」の内。内題「御堂関白集」。墨付15丁。一面10行。和歌2行書。傍書・書入等なし。巻首に、「書肆伊藤清兵衛伝借本延宝八年七月写」とあり。延宝八年（一六八〇）写。

3 彰考館蔵本（巳・八・〇七〇二九） 〈彰丙〉

外題「御堂関白集」。見返題同、道長の伝を記す。貼葉装、升型本。墨付17丁。一面9行。和歌2行書。傍書あり。55番歌・56番歌詞書・58番歌詞書を行間に補入す。奥書なし。

4 高松宮本（歌三・二八三） 〈高〉

有栖川宮家旧蔵本。宮内庁書陵部旧蔵、国立歴史民俗博物館現蔵。外題「御堂関白集」、内題同。墨付10丁。一面10行書。和歌1行書。集付・傍書・欄外書入あり。14番歌詞書「御返し」あり。奥書なし。

5 田中教忠旧蔵本 〈田〉

『私家集伝本書目』に「田中」として載る。田中教忠旧蔵本の大半は国立歴史民俗博物館の所蔵になるが、同館の目録には見えず、所在が確認できない。一応、この位置に置く。未調査。

6 川越市立図書館蔵本 〈川〉

「十二家集」の内。未調査。

7 **宮内庁書陵部蔵本** (五〇一・四四八) 〈書甲〉

「古歌集」の内。内題「御堂関白集」。墨付11丁。和歌1行書。集付・傍書・異文注記あり。本奥書Bあり。

8 **宮内庁書陵部蔵本** (五〇一・七四一) 〈書乙〉

御所本。外題「御堂関白集」、内題同。墨付10丁。一面10行。和歌1行書。集付・傍書・異文注記あり。奥書なし。14番歌の詞書「御返し」あり。

9 **宮内庁書陵部蔵本** (四五六・一) 〈書丙〉

「片玉集(前集) 和歌之中 廿四」の内。藍川員正編輯。「橘為仲朝臣集」等と合綴。内題「御堂関白御集」。墨付10丁。一面11行。和歌1行書。書入等なし。本奥書Aあり。56番歌と55番歌の順が転倒。

10 **宮内庁書陵部蔵本** (四〇六・一〇二・一〇四〜二) 〈書丁〉

「池底叢書」第四十八巻の内。「朝忠卿集」等と合綴。内題「御堂関白集」。墨付11丁。一面10行。和歌1行書。傍書・異文注記あり。本奥書Aあり。14番歌詞書「御返し」あり。

11 **国立国会図書館蔵本** (二〇二・八七) 〈国〉

「二十六家集」第一冊の内。「聖廟御詠」等と合綴。内題「御堂関白集」。墨付7丁。一面13行。和歌1行書。傍書・異文注記あり。奥書なし。

12 **内閣文庫蔵本** (二〇一・四六〇) 〈内〉

楓山文庫旧蔵本。外題「御堂関白集」、内題同。墨付17丁。一面9行。和歌2行書。書入等なし。奥書なし。

13 **東京大学文学部国文研究室蔵本** (本居帙一〇八・四六八) 〈東〉

「源賢法眼集」等と合綴。外題「源賢／御堂関白／師氏／頼実集」。内題「御堂関白集」。墨付8丁。一面12丁。和歌1行書。集付・異文注記・傍書あり。本奥書Bあり。

14 **静嘉堂文庫蔵本** (五〇三・六) 〈静嘉〉

松井文庫本(松井簡治旧蔵)。「清慎公集」他と合綴。内題「御堂関白集」。墨付8丁。一面13行。和歌1行書。集付・傍書・異本注記等あり。奥書なし。北静廬(慎言)校正本。『静嘉堂文庫所蔵 歌学資料集成』にマイクロフィルム刊行。

15 **静岡県立中央図書館蔵本** (九一一・一三・二七) 〈静葵〉

葵文庫本。「左大臣高明集・恵慶集・安法集」と合綴。外題「家集」。内題「御堂関白集」。墨付5丁。一面20行。和歌1行書。集付・欄外書入・傍書・異文注記・線引等あり。奥書「文化八年正月下旬毛弖樹」。文化八年(一八一一)写。

16 **志香須賀文庫蔵本** 〈志甲〉

久曽神昇氏蔵。「伊勢物語系図」等と合綴。未調査。

17 **志香須賀文庫蔵本** 〈志乙〉

久曽神昇氏蔵。未調査。

18 **神宮文庫蔵本** (文・一四二一) 〈神〉

林崎文庫旧蔵、天明四年(一七八四)八月村井古巌奉納本。外題

「御堂関白集 全」、内題同。墨付17丁。1面10行。和歌2行書。書入等なし。奥書なし。『私家集大成』中古Ⅱ（昭50 明治書院）に翻刻。

19 賀茂別雷神社三手文庫蔵本 （歌・中・三三） 〈三〉

今井似閑奉納本。「左大臣高明集」と合綴。外題「左大臣高明集／御堂関白集」。墨付13丁。一面9行。和歌1行書。匡郭あり。集付・傍書・異文注記・欄外書入（朱）あり。奥書なし。14番歌詞書「御返し」あり。

20 龍谷大学大宮学舎図書館蔵本 （〇二三・五九一・一四／四〇） 〈龍〉

写字台文庫本。「四十人集」の内。小沢蘆庵校正本。外題「御堂関白道長集」、内題「御堂関白集」。墨付8丁。一面12行。和歌1行書。集付・欄外注記・傍書・異文注記（多く朱）あり。本奥書B（朱）あり。「写字台蔵書」印。『龍谷大学善本叢書』18（平10 思文閣出版）に影印。

21 天理図書館蔵本 （〇八一・イ・一五・一六） 〈天甲〉

竹柏園旧蔵本。慶応二年（一八六六）横山由清校本。外題「御堂関白集」、内題同。墨付11丁。一面9行。和歌1行書。集付・異文注記・欄外書入あり。「夕」本（丹鶴叢書本）「イ」本の注記多し。本奥書Bあり。丹鶴叢書本の本奥書Aも注記。奥書「慶応二年十月五日以丹鶴叢書本一校了／横山由清」。「竹柏園文庫」印。

22 天理図書館蔵本 （九一一・三三・三二一） 〈天乙〉

外題「御堂関白道長公集」、扉題「御堂関白道長公集／源俊頼朝臣筆」。一面8行。和歌2行書。1～8番歌と73番歌の次の詞書を欠く。書入等なし。奥書なし。印記「園林文庫」。俊頼筆というが、書写年代は新しい。伝俊頼筆本の模写かとされる。

23 春海文庫蔵本 〈春甲〉

天理図書館春海文庫蔵。「中園集」と合綴。文政七年（一八二四）多勢子写。未調査。

24 春海文庫蔵本 〈春乙〉

天理図書館春海文庫蔵。「源賢法眼集」等と合綴。未調査。

25 篠山市立青山歴史村資料館蔵本 （国一九三） 〈青〉

旧青山会文庫蔵本。青山家旧蔵本。外題「御堂関白集」、内題同。墨付15丁、遊紙前後各1丁。一面10行。和歌2行書。傍書あり。14番歌詞書「御返し」あり。奥書なし。奥書「一校了」、「南可」印。

26 ノートルダム清心女子大学蔵本 （C三） 〈黒甲〉

黒川家旧蔵本。「古歌集」四冊の第一冊の内。「清慎公集」他と合綴。内題「御堂関白集」。墨付11丁。一面9行。和歌1行。集付・傍書あり。本奥書B（朱）あり。巻頭に「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」他印。

27 ノートルダム清心女子大学蔵本 （C三） 〈黒乙〉

黒川家旧蔵本。岸本由豆伎校本。「大江千里集・平忠盛集」と合綴。外題「大江千里集／御堂関白集／平忠盛集」、内題・扉題「御堂関白集」。扉に道長の伝あり。墨付10丁。一面10行。和歌1行書。集付・傍書・異文注記（墨・朱）あり。本奥書A（墨）・本奥書

B(朱)あり。巻頭・扉に「稲廼舎蔵書」「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」他印。

28　ノートルダム清心女子大学蔵本（H一四七）　〈黒丙〉

黒川家旧蔵。外題「御堂関白集」、内題・巻首題同。墨付11丁、遊紙前1丁。一面10行。和歌1行書。墨の傍書・欄外書入あり。「俊」本(伝俊頼筆本であろう)の異文注記多し。本奥書Aあり。「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」印。

29　今治市立河野信一記念文化館蔵本（三四七・八六六）　〈河〉

「清慎公集」「右大臣師輔公集」と合綴。外題「清慎公 道長公／師輔公 御集」、内題「御堂関白集」。墨付8丁。一面12行。和歌1行書。集付・傍書・異文注記あり。付箋三葉あり。本奥書Bあり。書写奥書「右三家集以小津美濃子蔵本書写 二巻之内／文政四年辛巳十月／小津久足(花押)」。文政四年(一八二一)小津久足写。

30　山口県立図書館蔵本（一〇三）　〈山〉

今井似閑本。「左大臣高明集」と合綴。外題「左大臣高明集／御堂関白集」。墨付14丁。一面8行。和歌1行書。集付・傍書・異文注記・欄外書入(朱)あり。奥書「校合了」(朱)。14番歌詞書「御返し」あり。三手文庫本は親本にあたる。

31　九州大学付属中央図書館蔵本（萩・ケ・三）　〈九〉

萩野文庫本。「源賢法眼集」等と合綴。外題「源賢法眼／御堂関白／海人手古良／故侍中左金吾 集 全」、内題「御堂関白集」。墨付8丁。一面12行。和歌1行書。集付・傍書・異文注記・欄外書入(墨・朱・青墨)あり。本奥書Bあり。

32　島原市立島原図書館蔵本（一三五・一六）　〈島〉

松平文庫本。外題「御堂関白集」、内題同。墨付10丁。一面10行。和歌1行書。傍書(墨)あり。奥書なし。「尚舎源忠房」「文庫」印。『松平文庫影印叢書』第二巻(平5　新典社)に影印。『新編国歌大観』第三巻（昭60　角川書店)に翻刻。

33　『丹鶴叢書』版本　〈丹〉

「九条右大臣集」「家経朝臣集」と合綴。内題「御堂関白集」。墨付10丁。一面10行。和歌1行書。匡郭あり。集付・傍書・異文注記あり。柱刻「御堂」。本奥書Aあり。国書刊行会刊本に翻刻あり。

以上の諸伝本は、形態上三つに分類できる。すなわち、①単独で一書を成している本、②他の家集と合綴されている本、③叢書の中に収められている本、の三種である。

①は、3彰丙・4高・5田・8書乙・12内・17志乙・18神・21天甲・22天乙・25青・28黒丙・32島の十二本がこれにあたる（但し、5・17は未確認）。わずか七十三首、十丁ほどの小家集であるから、単独で一書とされることはさほど多くないようである。

②の合綴状況には、次のようなパターンがある。

(1)「中園集(公賢)」と合綴…1彰甲・23春甲

(2)「源賢法眼集」「海人手古良集(師氏)」「故侍中左金吾集(頼実)」と合綴…13東・31九（おそらく24春乙も。また、26黒甲は八集合綴であるが、四集ずつ別紙別筆で、後半はこの形である）

(3)「清慎公集」「四条大納言隆房集」「正治二年十月一日歌合」と合綴…14静嘉
(4)「左大臣高明集」「恵慶集」「安法集」と合綴…15静嘉
(5)「伊勢物語系図」等と合綴…16志甲
(6)「左大臣高明集」と合綴…19三・30山
(7)「大江千里集」「平忠盛集」と合綴…27黒乙
(8)「清慎公集」「右大臣師輔公集」と合綴…29河

③には、9書丙「片玉集」・10書丁「池底叢書」・33「丹鶴叢書」のように歌書に限定されない広範な書物を集積した大きな叢書に収められたものと、2彰乙「諸家集」・6川「十二家集」・7書甲「古歌集」・11国「二十六家集」・20龍「四十人集」のように私家集を集めた叢書中のものとがある。多くは数集合綴するが、20龍「四十人集」は他集と合綴せず一集ずつ分冊になっている。

三　二種の本奥書について

ところで、『御堂関白集』には、複数の伝本に共通して見られる本奥書が二種存する。先の一覧に本奥書A・Bと記したものである。

本奥書Aは、鎌倉末期の嘉元二年（一三〇四）二月二十七日の日付のある奥書である。既調査の本の中では1彰甲・9書丙・10書丁・21天甲・27黒乙・28黒丙・33丹の七本に存する。1彰甲ではこの奥書を持つ本を「古本」と称している。本により小異があるが、1彰甲により、句読点を施して引用すると、次のようである。

本云
鎌倉於旅宿藤谷殿被見御堂大殿集。予始而見之、則書写之。此
本者従故禅門之時所持云々。雖然不分明本歟。以證本可校合者也。
嘉元二年二月廿七日　判アリ
校合終
春雨軒宗也

嘉元二年（一三〇四）二月に、鎌倉の旅宿で（9書丙には「於鎌倉旅宿」とあってわかりやすい）「藤谷殿」から「御堂大殿集」を見せられた。初めて見たのですぐに書写した。この本は「故禅門」の時から所持しているそうだが、明解でないところの多い本であり、信頼できる本で校合すべきだ、というのである。「藤谷殿」は、冷泉為相（弘長三年（一二六三）～嘉暦三年（一三二八））。嘉元二年には四十二歳。従って、「故禅門」は、その父為家（建久九年（一一九八）～建治元年（一二七五））であろう。末尾の「春雨軒宗也」については未詳である。嘉元二年二月に某人が冷泉為相所持本を書写し、その本に、後の某年に「春雨軒宗也」が他本を以て校合したというのであろう。1彰甲と10書丁の二本を除く9書丙・21天甲・27黒乙・28黒丙・33丹の五本には「校合終／春雨軒宗也」の部分がない。これらの本は宗也校合以前の形ということになるのだろう。『御堂関白集』の少なくとも一部の伝本が、定家―為家―為相と連なる御子左・冷泉家に伝来した本に由来することを示す貴重な奥書である。

一方、本奥書Bは、近世中期の宝永七年（一七一〇）一月の「千

之斎」による奥書である。7書甲・13東・20龍・21天甲・26黒甲・27黒乙・29河・31九の八本に見える。7書甲により引用する。

若冲本奥書云

宝永七年孟春以今井氏校合畢　千之斎

宝永七年（一七一〇）一月に「千之斎」が「今井氏」の本を用いて校合したという。「若冲本奥書云」とあるように、「千之斎」は国学者海北若冲（延宝三年（一六七五）～宝暦元年（一七五一））のこと。「今井氏」は若沖と同じく契沖の門人であった今井似閑（明暦三年（一六五七）～享保八年（一七二三））であろう。「今井氏」の部分、20龍と27黒乙には「今井氏本」とあってわかりやすい。今井似閑の本は三手文庫本（19三。30山はその転写本）として現存している。この本によって校合したというのであろう。なお、「孟春」の部分が20龍には「孟夏」とあるが、誤写であろう。この本奥書Bを持つ本の特色は、内題の下に「東三条摂政兼家男道長」（但し、7書甲・26黒甲は「兼良男」、13東・29河は「兼家子」とあり、27黒乙にはない）、1番歌詞書の上部欄外に「三位中将宇治頼通公入道殿之嫡子也左衛門督は公信卿也」（21天甲と27黒乙にはない）との勘注があることである（但し、11国には両勘注があるが奥書はない）。

四　伝俊頼筆古筆切について

先にも触れたように、『御堂関白集』には、他に源俊頼筆と伝える古筆切が二葉存在する。ひとつは東京国立博物館所蔵の古筆手鑑『月台』に貼られたもので、5番歌を詞書の途中から記した7行である。もうひとつは『書道全集』巻十四（昭31　平凡社）に所載の一葉で、詞書を欠く7番歌および8番歌の部分の8行である（ともに『古筆学大成』第十九巻（平4　講談社）所収）。これについては、杉谷寿郎氏が、天理図書館蔵伝源俊頼筆本（22天乙）との関係を考察され、「俊頼と伝称されるこの切と、俊頼筆本を底本としたという天理本とは、その本文が重複しないものであるということが知られ、両者の関係は俊頼筆という呼称の偶然の対応ばかりではなさそうである。すなわち、この事実から押すと、天理本の巻頭八首欠脱という形は、俊頼筆といわれる書写本の巻頭が切断されたのちに写されたものではないかと考えられる」と言われた（「御堂関白集について」『和歌史研究会会報』第四十号（昭45・12）。のち『平安私家集研究』（平10　新典社）所収）ので間違いないであろう。確かに、両切と天理本の本文を見比べてみると、他の本に比してやや古態を有した文字使いや二行書の和歌の書き方などに共通性が見られる。個別の表記上の特徴としては、古筆切8番歌詞書冒頭の「御まへ」という表記は他の伝本にない独特なもので、これは天理本（22天乙）が37番歌・40番歌・53番歌各詞書の「御前」をいずれも「御まへ」と表記しているのと一致する（45番歌詞書の「御前」は「御所」とする）。伝俊頼筆の真偽はともかく、相当古い時代の形態を留めた遺物として両古筆切は注目され、また、ずっと後世の模写本とは言え、天理本も貴重な資料的価値を有する伝本と言うべきであろう。

五　諸伝本間の本文上の特色

最後に、三十三点の伝本のうち、調査済みの二十七本について、本文上の特色が見られる伝本を指摘し、特に近接した関係にあると見られる伝本のグループをいくつか挙げてみたい。

〔歌数の相違〕

歌数の点では、22天乙が巻頭の八首と末尾の詞書を欠き、六十五首の歌から成るという大きな特徴がある。これは、杉谷氏が言われる通り、親本以前の段階で巻頭の数丁と末尾が切断されていたためで、もともとは他の諸伝本と同じ形態であったものと考えられる。切断された巻頭部分の一部が二葉の古筆切として伝わっているわけである。もっとも、切断されたのは巻頭部分だけで、末尾の詞書は中断した不完全なものなので、書写の際に除かれたものである可能性もある。他に諸本間における歌数の相違はない。但し、33丹は、39番歌の肩に「原本缺在一本」と注しているから、底本とした本にはなかったようである。また、3彰丙は、55番歌と56番歌の詞書・58番歌の詞書を行間に補入する形で記すが、親本になかったのを補ったというよりは、書写の際の単純ミスで脱したのを校正して補入したのではないかと思う。33丹は、55番歌の肩に「イニアリ」と注記する。親本が3彰丙と同様55番歌を欠いていたのを他本で補ったというのであろうか。なお、歌数には関係ないが、5番歌の詞書の一部(「わりなしとて……たちたまひぬるかとあれは」の部分)を脱した本がいくつか存在する。7書甲・15静葵・21天甲・26黒甲・31九の五本である。そのうち、21天甲は、上部欄外に「タ」本(丹鶴叢書本)により補入している。一方、14静嘉は、当該部分に「イナシ」と注記している。「あれは」の文字に目移りして生じた誤脱と思われ、共通して脱落を有する伝本の本文上の近接性が窺われる。

〔詞書の有無の相違〕

13番歌と14番歌は、多くの本が二首連作のごとくに記すが、4高・8書乙・10書丁・19三・25青・30山・33丹の七本には、14番歌に「御返し」の詞書があり、13番歌と贈答とする。おそらく詞書があるのが正しく、これらの本は共通祖本に生じた詞書の脱落を踏襲したものと考えられる。また、第60番歌の詞書「御かへり事」が、4高・8書乙の二本には存在しない。共通の脱落と見られるから、七本のうちこの二本は特に近いことがわかる。

〔歌順の相違〕

9書丙は、55番歌と56番歌の歌順が転倒している。詞書はそのままに、歌だけが入れ替わった形になっている。これは他本に見られない現象なので、同本にのみ生じた独自の錯誤と見られる。

〔欠字箇所の注記〕

『御堂関白集』には、諸本ほぼ共通して欠字になっている箇所が三箇所(28番歌・32番歌・64番歌)ある。そこにどのような注記がなされているかによって分類すると、だいたい次のようになる。

・「本」と注記…4高・8書乙

・「本ノマヽ」と注記…19三・30山・32島（三は28番歌「本ノ」）
・「校本同」または「校合同」と注記…7書甲・13東・14静嘉・15静葵・20龍・21天甲・26黒甲・27黒乙・29河・31九
・注記なし…1彰甲・2彰乙・3彰丙・9書丙・10書丁・11国・12内・18神・22天乙・25青・28黒丙・33丹

また、巻末の詞書がとぎれた形になっているところにも注記のある本が十一本ある。それらは次のように分類できる。

・「本」と注記…4高・8書乙・11国
・「本ノ」と注記…19三・30山
・「本ノマヽ」と注記…32島
・「本同」と注記…14静嘉・27黒乙・29河
・「下闕」と注記…2彰乙
・「以下缺諸本同」と注記…33丹

〔集付・勘注の有無〕

その他の注記類の有無について。勅撰入集歌等を歌の肩に注記した集付がある本は、次の十四本である。

4高・7書甲・8書乙・14静嘉・15静葵・19三・20龍・21天甲
・26黒甲・27黒乙・29河・30山・31九・33丹

また、1彰甲・3彰丙の両本には、扉題または見返題の周囲に道長の伝が書かれている。本奥書Bを有する7書甲・13東・20龍・21天甲・26黒甲・27黒乙・29河・31九の八本と11国には、内題の下に道長に関する勘注、1番歌詞書の上部欄外に「三位中将」と「左衛門督」に関する勘注を付していることは先に触れたが、他に、4高・8書乙・14静嘉・19三・20龍・27黒乙・29河・30山の八本には、57番歌に関して「尚侍の督の殿」に関する勘注を欄外に記している。

＊　＊

以上のような相違点も含め、表記上の類似性から、諸伝本のうち特に近接した関係にあると見られる本を以下に挙げておく。

○1彰甲・10書丁
○3彰丙・9書丙・28黒丙
○7書甲・21天甲・26黒甲・31九
○4高・8書乙
○19三・30山（ともに今井似閑本）

おわりに

以上、伝本調査が不十分なまま、気付いたことを覚書風に記してみた。今後さらに調査を進めて、より完全なものにしたいと思う。本稿はその中間報告として位置づけたい。なお、これまで調査済みの諸本を対象にして「『御堂関白記』校本稿」（国文学研究資料館文献資料部『調査研究報告』第二十一号掲載予定）を作成した。ご参照いただければ幸いである。末筆ながら、調査にあたってお世話になった文庫・図書館の各位、またさまざまなご教示を賜った方々に、いちいちお名前は記さないが、心より御礼申し上げる次第である。

――せのお・よしのぶ、広島大学文学部助教授――